厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合事業）

分担研究報告書

社会環境が結婚・出産・育児に及ぼす影響に関する研究

分担研究者	高野　陽	日本子ども家庭総合研究所母子保健研究部長
研究協力者	小山　修	日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部長
	宮原　忍	日本子ども家庭総合研究所母性保健担当部長
	水野清子	日本子ども家庭総合研究所栄養担当部長
	加藤忠明	日本子ども家庭総合研究所小児保健担当部長
	千賀悠子	日本子ども家庭総合研究所母子保健部主任研究員
	齋藤幸子	日本子ども家庭総合研究所母子保健部主任研究員
	斉藤　進	日本子ども家庭総合研究所母子保健部研究員
	大賀英史	日本子ども家庭総合研究所嘱託研究員
	小野寺伸夫	国際学院埼玉短期大学教授
	千葉　良	仙台赤十字病院小児科部長
	大日向雅美	恵泉女学園大学教授
	山岡テイ	情報教育研究所代表
	神宮英夫	明星大学教授
	大島恭二	東洋英和女学院大学助教授
	島内憲夫	順天堂大学助教授

研究要旨

子どもの健全な発育発達や健康とＱＯＬの向上、その親の個人生活の向上を図ることを視点として、子育て中の親のニーズについて、保育園児の保護者に対するアンケート調査と育児グループの母親や各分野の専門家からの聴き取り調査により検討した。直接的な育児負担の軽減には多様性のある保育サービスのニーズは大きく、これと同等に生活全般の利便性を向上させるための公的・私的支援が必要であること、子どもの発育発達や健康に関する知識と情報の適切な提供、親個人の問題の解決に必要な専門的な相談体制の確立も必要であることを確認した。また、家庭や社会における性別による格差に対する不満感や不公平感の是正を図ることなどの社会と雇用の改革も求められる。さらに、保育の向上を図るための保育者への支援によって、子育て支援に間接的な対応も可能となることも指摘され、公私併せた子育て支援体制の確立の重要性が強調できる。

A．研究目的

少子対策の確立には、単に多産を目指すことのみでは不完全であり、また、それだけでは十分な効果は期待できない。また、今日、子育ての実践においてに発生している問題の多くは、少子化が背景にあることも指摘されることから、よりよい育児の実践により、子どもの健全な発育発達と健康の保持増進を保障し、親自身の生活の充実を図るためのニーズを把握し、少子対策としての方策の確立を目的として多角的な調査を実施することにした。

B．研究方法

昨年度において実施した保育園児の保護者に対するアンケート調査に記述された自由記載の分析とその結果に基づく新たなアンケート調査を、全国的規模において保育園児の保護者を対象に実施した。

また、各地の育児グループに属する母親やその指導的立場にある人材に対する聴き取り調査、小児保健学・児童福祉学・心理学・保健行政学・教育学及び健康教育等の各分野の専門家からの聴き取り調査を実施した。

C．結果

C-1 社会環境が出産・育児に及ぼす影響について -平成１０年度「子育てに関するアンケート」自由記載回答の質的分析結果より-

1.はじめに

平成10年度に行った「子育てに関するアンケート」調査において、「子育てをしていて、日頃感じていること。行政への要望」などの意見を自由記載で求めたところ、男性478人(12.8%)・女性1098人(25.2%)、計 1,576 人の回答者（全体の２０％）の記載があった。自由記載では、本調査ですくい上げられなかった問題点が、回答者の生の声として現れている点が貴重である。また、本調査でも設問した内容がさらに記載されている場合はその切実さ・緊急性の度合いが強いと解釈できよう。これらの意見を活かし、今後の少子対策に活用していくために、以下の目的・方法に従って、分析を行った。

2.研究目的

1）平成 11 年度の研究内容に反映すべく、設問調査で　すくい上げられなかった問題点や今後の課題を抽出する。

2）問題点のみならず、子育ての喜びやメリット、有効な施策など、プラス面をも明らかにする。

3）社会環境の子育てに及ぼす影響をハード領域・ソフト領域それぞれに体系的に整理する。

3.研究方法

意見の多少を問うのではなく、新たな観点や緊急に取り組むべき課題の抽出を目標とした。まず、全体を次のように大別した。

1）子育てに関る現状の困っていること、不満と要望をあげた否定的意見「社会環境の問題点の記述」

2）子育てしていく上での親個人としての悩み、喜び、子どもへの想い、周囲の支援や自分の置かれている状況への感謝など「個人的な現状についての記述」

前者１）を物理的な環境問題（ハード領域）と精神・風土的環境問題（ソフト領域）に、さらに中分類・小分類に分け、表１のごとく整理した。

4．結果

4-1.社会環境の出産・子育てに及ぼす問題点について

1）物理的な環境に関する問題点

施設・制度などハード領域についての記述内容はその一部を表２に例としてあげた。

（1）子育てに関る経済負担について

1.1.1 医療費

• 子どもの医療費については、「控除年齢を引き上げて欲しい」など補助の拡充が求められていた。また、地域による補助の格差の指摘もあった。

• 「妊婦健診を無料に」「出産の費用が高い」のほか、「不妊治療を健康保険で」との希望があった。

1.1.2.保育料

• 「高すぎる」という意見や「安くして欲しい」という軽減の希望が多かった。「0 歳児保育料が高い」ことは、運営側からすればコスト面から当然と言えようが、利用側からすれば２人目出産のハードルである。

• 「夜間保育の保育料が高い」など、認可園の保育時間帯で親の勤務に対応できない場合、認可外施設を利用したり、二重保育や夜間保育を利用するために特に負担が大きくなっていた。

• 保育料の地域間格差に対する不満や、親の収入によって差をつけることへの反対意見から、「保育料を一律に」という希望がみられた。

表1　自由記述内容の分類項目別件数

大分類	中分類	小分類	内　容	男性	女性	合計
1.物理的な環境（ハード領域）1,149件	1.1.子育ての経済的負担	111	医療費（子どもの医療費、出産・不妊治療の費用）	15	66	81
		112	保育料（高い、格差の是正）	32	98	130
		113	教育費など	17	45	62
		114	減税・手当ての希望	26	46	72
		115	その他経済全般（生活費、ローン）	12	72	84
	1.2.就労環境	121	育児休業関連（期間延長、所得保障）	3	11	14
		122	残業・時短・フレックス制	5	21	26
		123	雇用の安定・再就職支援	1	9	10
		124	その他就労に関わる全般的意見	22	17	39
	1.3.生活環境（公的）	131	保育環境（保育園の数、保育のメニュー、質など）	51	281	332
		132	公共施設（公園・学校・病院など）の整備	24	65	89
		133	福祉制度や公的サービスの充実（年金、子育て支援）	66	43	109
	1.4.生活環境（私的）	141	住環境	4	17	21
	1.5.ハード領域その他	150	ハード領域に関するその他・全般的意見	48	33	81
2.精神・風土の環境（ソフト領域）504件	2.1.社会全体・地域社会	211	差別的風土（女性、障害者、未婚の母など）	5	75	80
		212	子どもや育児中の親への理解や配慮の不足	2	115	117
		213	行政窓口などの対応	6	14	20
		214	社会不安（暴力・犯罪・偏差値教育・学歴社会）	18	45	63
		215	教育力・養育力の低下（個人および地域）	50	72	122
	2.2.企業内	221	子育てに不利な企業体質・慣行・風土	2	22	24
		222	女性の立場	1	11	12
		223	男性の立場	6	18	24
	2.3.家庭・家族	231	夫婦の関係	2	19	21
		232	親（子どもの祖父母など）との関係	2	5	7
	2.4.ソフト領域その他	240	ソフト領域に関するその他・全般的意見	5	4	9
3.個人領域の記述　333件	3.1.子どもや子育てについて	311	子育てに関する悩みなど否定的記述	5	83	88
		312	仕事と育児の両立に関する悩み	4	14	18
		313	育った環境と現在	1	9	10
		314	子育て観・教育観	33	2	35
		315	子どもへの思い・伝えたいこと	20	11	31
		316	子育ての楽しさ・喜び・得られたもの	21	85	106
		317	周囲への感謝（両親・保育園・職場など）	4	41	45
4.その他　129件		411	その他の記述（主義・主張など）	18	21	39
		412	アンケートについて	48	46	94
合　計				579	1536	2115

• 学童保育の保育料が高いという意見と地域間格差の問題もあげられた。

1.1.3.教育費など子育て費用全般および生活費：

• 教育費ほか、「子育てにお金がかかりすぎる」という意見が多い。

• 生活費全般としては、「経済的に苦しい」理由に住宅ローンや不況による影響などがあげられた。

• このような現状に対する経済支援としては、「子育て減税」「児童手当の延長」や親への手当てを望む声があげられた。

• 一人親への支援の拡充の希望もあり、「離婚訴訟中の期間の生活費」や「父子家庭の母子家庭との違い」など、不公平感とともにきめ細かい支援の要望があげられた。

1.1.4.その他

不況などによる経済的な厳しさの現状は深刻であり、第 3 子を望みながら、経済的理由で断念した例もあった。

（2）就労環境

「仕事と育児の両立のための総合的支援が必要である」という意見に代表されるが、分類項目別にあげると以下の通りである。

1.2.1. 育児休業関連

• 現在育児休業法に定められている 1 年の休業期間を「延長してほしい」「休業中の所得保障」などさらなる制度の拡充を望む声があった。また「男性にも取得を義務づける」という意見もみられた。

• 出産後の育児休業とは別途、「子どもの病気の時の看護休暇」の希望があった。

1.2.2. 勤務時間の短縮など

• 「就業時間の短縮」「残業のない体制」「フレキシブル体制」などの希望があった。

• 自営業者からはゆとりをもって子どもと過ごす時間がとれるよう、国民的休日の増えることへの希望があがった。

1.2.3. 雇用の安定・再就職

• 「自分の将来が心配」など就業継続の不安があった。

• 育児期間後の再就職・復職を希望する人もあった。

（3）公的環境（公的施設やサービスについて）

1.3.1. 保育環境

• 保育園については、まず数と時間的対応の不足があげられていた。「保育園が足りない」「土曜も 1 日保育を」ほか・休日・夜間の保育が求められていた。延長保育は 0 歳児から対象とすること・学童保育の時間延長も望まれていた。

• 病院や企業など事業所内保育所の希望もあった。

• 「病児保育の取り組みを早くして欲しい」「園に病児保育室を併設して欲しい」など病気の時の対応については切実であった。

• 「リフレッシュや趣味のため」「母親が病気の時」など就業以外の理由でも預かってもらえる一時的保育の希望があった。

• 「安心して預けられる環境が欲しい」など、保育の内容面にかかわることもあげられ、「細かい気配りができず気の毒」など保育者の立場にたって増員を望む声や「保育者が母性神話を信じている」など疑問があがった。

• 運用上の問題では、「いつでも誰でも入所できる」という希望のある一方、「本当に必要な人だけ利用すべき」という意見もあった。入所の優先順位に対する不満もあげられた。

1.3.2.その他の公的施設の整備

• 「子ども連れで出かけられるところが欲しい」など親子で利用しやすい施設建設の希望と、「男性トイレにもおむつ替え用ベッドを」など一般の施設が親子づれでも使い易くなるよう望む声があった。

• 「安全で広い公園が欲しい」ほか、子ども向けの施設（公園・図書館・児童館）では、制限をつけず自由に使えることが希望としてあげられた。

• 道路の安全、特に保育園の周辺など安心して通れる広い道（ベビーカーが通れること）が望まれている。高齢者・障害者（児）が安心して暮らせる社会を望むという記述もみられ、公共部分のバリアフリーの要望と受け止められる。

• 学校や教育制度について、教育内容や教師に関する疑問、少子化に伴う学校の統廃合問題などがあげられ、近い将来の子育ての不安が現れていた。

1.3.3.制度やサービスの拡充

• 「PTA 活動・地域活動など子どもを持つために課せられる社会的負担はきびしい。税金をあげてもサービスを充実させてほしい。」という意見や、各種窓口など行政サービスについては、「働く親が仕事を休まずに利用できること」の要望があった。

• 「高齢者・障害者（児）が安心して暮らせる社会を」との声には、万一の時の保障が求められているといえる。「老後や万一の不安がなくなれば、現在の負担に耐えられる」との意見があった。

• 「子どもに負担のかからない年金制度を」「専業主婦は優遇されている」などの「税制・年金制度を平等に」との声があった。年代別、家庭形態別、有業無業

別、未既婚別、子どもの有無別などによって負担や恩恵の差があることに、経済的不公平感を感じている。

（4）私的生活環境

1.4.1.住環境

• 「家が狭い」ことの不満があげられ、「子どもがいても周りに気兼ねせずのびのびできる住環境」が求められていた。

• 「両親と同居したいができない」「実家が遠い」など、親との関係を保つのに不都合な状況もみられた。

（5）ハード領域その他

• 「公害問題」や「環境汚染」など自然環境の悪化が子どもを育てることへの不安を招いている。

• 「国や社会はなにもしてくれないことがわかった」「今の日本の社会をみていると、子どもを産んだ事を後悔している」など国や社会のあり方に絶望感があり、子どもをもって、それを強く感じたという意見があった。

2）精神・風土の環境（ソフト領域）

精神や風土に関るソフト領域についての記述内容はその一部を表3に例としてあげた。

（1）社会全体・地域社会

2.1.1.差別的風土

• 「社会全体の価値観が変わらなければ、子どもは増えない」との意見に代表されるが、社会一般の「子育は女性の仕事」という男女の固定的役割分担意識や、「ひとり親に対する偏見」「障害児や女性の立場の弱さ」などがあげられた。

2.1.2.子どもや子育中の親への理解や配慮の不足

• 「女性だって疲れるし、ゆっくりしたい」「育児中の母親は、自由な時間がなくて当たり前という周りの態度がつらい」など、育児中の親への理解・配慮の不足している様子が分かった。

• 子どもが伸び伸びと過ごすことへの周囲の理解も乏しく、親は常に気を使っている状況もみられた。

2.1.3.行政窓口の対応について

• 各種手続きや相談などで窓口を訪れた時の対応については、「対応の冷たさにとても心痛んだ」など、問題点があげられた。

2.1.4.社会不安

• 「いじめや学級崩壊」などの教育問題や学歴社会・犯罪の増加に対する不安や不満、情報化社会の弊害もあげられ、「現在の社会状況や子どもの将来を考えると子どもを産むのを躊躇する」という意見がみられた。

2.1.5.教育力・養育力

• 「無責任な親が多すぎる」「保育者や教師が理想をもっていない」など他の親や学校・地域社会の教育力の低下を指摘する意見があった。親への支援として子育てセンターや相談室の要望、学生時代からの教育の必要性もあげられた。

（2）企業風土など

2.2.1.出産・育児に不利な慣行・風土

• 企業内における子育てに不利な慣行・風土としては、法律が制定されていても、「育児休業が実際にはとりにくい」状況、復帰後は「子どもの病気や学校行事などのための休暇がとりにくい」状況があげられた。

2.2.2.女性の置かれている立場

• 男性優位な企業体質は女性から指摘された。

• 女性の置かれている環境としては、「妊娠中は同じようには働けないことを理解して欲しい」など妊娠中や子育中であることへの周囲の理解や配慮の不足があげられた。労働基準法の女子保護規定撤廃についての不安もあった。

2.2.3.男性の置かれている立場

• 男性の置かれている環境としては、「子育てを理由に休んだり早く帰ることが女性以上に難しい」企業体質の実態があげられた。

（3）家族・家庭環境

2.3.1.夫婦関係

• 対象者をとりまく家庭の問題としては、「夫が育児を分担してくれない」など夫婦間の家事・育児分担の問題があげられた。「パートナーが未熟ですべてひとりで負担せざるを得ない」など、精神的に未熟なパートナーを持った場合の子育ての困難さは、父母いずれのケースも認められた。

2.3.2.親（子の祖父母）との関係

• 親（子どもの祖父母）との関係では、「支援を頼らざるをえないが、育児方針が異なり困っている」などの問題があげられた。

4-2 個人的な内容の記述について

1）子ども・子育てに関する悩みなど否定的意見

「今の経済社会状況では、精神的余裕がなく子育てを楽しめない」「子どもが好きになれない」「子どもを持つことがハンディと感じる」「子どもはいないほうが楽。少ない方が楽と考えてしまう」「子育てに対して自己嫌悪を感じている」「自分の時間が欲しい」「金銭的にゆとりがないからイライラする。悪いと思いながら子どもに手をあげている」「親に休みを与えない

子どもなんて、いないほうがいい。行政、社会は全く協力的ではない。」など、様々な想いが語られた。子どもを持ったことを後悔し、そう思う自分への失望感があり、これ以上子どもを持ちたくないとしている。背景には社会環境の影響が垣間見られる（表4）。

2）育児と仕事の両立に関する悩み

「共働き状態の維持と子育ての充実に悩む」「仕事と子育てを天秤にかけてしまう」「子どもを持つか否かも迷い、職場への迷惑を考えてしまう」「仕事は自分自身の生きがいでもあるのに、母親は子どものために我慢を強いられる」「働いている事に充実感を感じているので、もう一人産む事はとても考えられない」など、仕事と育児のバランスで悩む様子が伺えた。（表5）。

3）対象者が育った環境についての記述

「自分の子ども時代、窮屈な思い出が多く、子どもを欲しがらない気持ちにつながっているのではないか」「安心した子ども時代を過ごして来れなかった人が親になっても子どもを持つ自信が持てない」など、過去の問題が現在の子育てに影響していると自ら考えている例があった。一方、自分の親を反面教師として現在の育児に意欲的に取り組む姿もみられた。

4）子どもを持つ喜びなど子育てに関する肯定的記述

子どもを持つ喜び・楽しみ・豊かさ・子どもの存在への感謝など「手放しの肯定的意見」と、「他のことを犠牲にしてもよいと思えるようになった」「経済的に苦しいことは苦にならない」「忙しいが充実している」など「苦労を上回る子どもの存在意義」が語られた（表6）。

5）子どもへの想い・メッセージ

どのような人に育って欲しいか、子どもへ伝えたいことや、子どもとの生活の現状が語られた。

6）家族など周囲への感謝

「夫の協力で育児が楽しくなる」「祖父母が手伝ってくれ助かっている」など感謝の気持ちが語られた。

7）職場や保育園への感謝

「看護休暇、6歳までの特別勤務制度があった職場に感謝」「保育園の先生に子育てを教えてもらった」など、公的支援の効用が現れていた。

5　考察

これまでにあまり議論されていない領域で、少子傾向の原因と思われるキーワードについて検討する。経済・社会保障面の支援拡充は繰り返し強調される必要あるが、ここでは直接的な育児支援策に関る問題に重きを置くこととする。

1）子育て中の親の不公平感

保育所に入所できる優先順位について不満感があり、保育料に関しては地域・親の収入・子どもの年齢・親の勤務時間体制によって負担が異なることについて、不公平感が認められた。当然のように扱われてきたこの格差は、現在育児中の人たちの現状不満の源となっている。また、年金・税制など世代別、家庭形態別、有業無業別、未既婚別、子どもの有無別などによって負担や恩恵の差があることに、経済的不公平感を感じていた。子育中の親が納得できる説明または是正が必要である。

2）保育内容、保育の質、保育園の役割・親との連携

保育環境に関してはメニューの充実がますます重要な課題であるといえるが、開かれた保育園に変容していく途上にある現在の保育環境において、保育サービスを必要としている緊急性の高い人達のニーズを確実に満たしていくことが大切である。通常の保育園の開園時間と異なる勤務体制の自営業・サービス業に携わわる親への支援のあり方は、一層の検討が必要である。また、親の勤務時間に合わせるだけでなく、「安心して預けられる環境が欲しい」との記述にみられるように、子どもの発育・発達を保障する保育の質が問われているといえる。保育園と親との連携については、保育園の行事や役員などを親が負担に感じているケースもあり、保育環境に関して親が主体的にかかわれる条件整備が望まれる。

3）育児中の親の精神的サポート、相談体制の専門性

親の個人的な記述「仕事と育児の両立に関する悩み（表5）」や「育った環境」についてみると、両立のための環境整備も必要であるが、個人の生き方の問題としての適切な精神的サポートが育児負担感の軽減に有効ではないだろうか。子どもに関する問題のみならず、親個人の問題をサポートするためには、プライバシーが守られた多方面の専門家体制が必要である。

4）親族による支援の限界と公的支援のあり方

本調査の設問で、子どもの世話を祖父母に頼む割合は70％に及んでおり、共働き世帯の子育ては祖父母の援助で支えられているのが実情であった。希望する人が親と同居できる住居環境も必要であるが、他方、若い世代が親に頼らず育児ができる生活支援の整備をすることが重要である。家族の問題は、個人的でありながら実は社会規範などの環境要因に影響されている

ことは言及するまでもない。個人的問題として抱え込まず、社会的支援を取り込む家族の開放性など、少子時代における新しい家族のあり方を模索していくことも必要であろう。

5）雇用環境の改善、社会（企業）の価値観の変革

男女ともに育児と両立しにくい企業内の風土が示された。休業期間の延長・再就職の斡旋・男性の育児休業取得促進・休暇中の所得保障などの希望があがり、男性・女性それぞれのキャリアやライフデザインに応じて、さまざまな選択が可能となるような制度が望ましい。

妊娠中や子育中であることへの周囲の理解や配慮の不足は、保健学的見地からの支援も大切である。子どもの看護や通院のための休暇については、一般的な年次有給休暇 20 日間では、足りなくなるのが実情であり、年齢ごとの保育園児の罹患率など保健学的検討に基づいてを施策を進めることが現実に即しているといえよう。また、同時に配慮すべきは、休みにくく、母親に片寄っている子どものための休暇取得を、父親が分担できるような職場環境への改革である。

6）生活全般の質の向上・将来の保障

子どもの健康問題は親の育児不安や育児負担感の要因となってるいことが本調査の設問で明らかとなっているが、医療費負担による経済不安をかかえた家庭はさらに危機的状況といえる。医療費補助を含めた健康支援は育児中の家庭支援の根幹として重要である。妊娠・出産・不妊治療に係る医療費については、医学の進歩に伴い、リプロダクトヘルスの視点で、親となる人たちへの健康支援のあり方を常に検証していくことが大切である。

子育てしやすい環境の整備としては、公園・児童館などのハードの充実とともに、開設時間を延長するなどの運用面で既存の施設をより有効に使えるようすることが、住民へのサービスの向上に繋がるであろう。公的サービスの窓口などは、働く親が利用しやすい運用を図ることで、育児・仕事以外の負担を減らし、ゆとりある育児へと繋げることができる。また、年金や税制における不公平感を無くし、万一の保障など将来に渡る安心感が、現在の子育ての支えとなるのことが分かった。教育問題や凶悪犯罪の増加などは子どもを産むことを躊躇させるほど親を不安にしており、まさに社会全体の質の向上が求められている。ハード・ソフト両領域の社会的養育力（社会の次世代育成力）が問われているといえよう。

6.小括

膨大な量の記述を紙面の許す範囲でまとめるためには、かなりの部分を割愛せざるを得なかった。しかし、当初の研究目的に添って、以下の通り問題点が抽出できた。主なキーワードは次の通りである。

1）子育て中の親の不公平感
2）保育内容、保育の質、保育園の役割・親との連携
3）育児中の親の精神的サポート、相談体制の専門性
4）親族による支援の限界と公的支援のあり方
5）雇用環境の改善、社会（企業）の価値観の変革
6）生活全般の質の向上・将来の保障

以上から、当研究班の分担領域としては2）保育内容、保育の質、保育園の役割・親との関係、3）育児中の親の精神的サポート、相談体制の専門性を、主軸に本年度の研究を進めることとした。

様々な葛藤をもちながら、懸命に育児に取り組む親達すべてにとって、「子育てに関する肯定的意見」であげられたような喜びや充実感が得られるよう、支援体制の充実に向け、さらに検討を進めていきたい。

（齋藤幸子・宮原　忍・千賀悠子）

表2　物理的な環境（ハード領域）についての記入例

1.1.子育てに関わる経済負担
1.1.1 医療費
- 医療費控除の年齢をもっと上げて欲しい
- 妊娠中の検診料を無料に
- 出産の費用は保険がきかない、高い。
- 不妊治療を健康保険で出来るようにして欲しい。

1.1.2 保育料
- 保育料が高い。
- 保育料の地域差が大きい。
- 保育料を一律に（所得による差をなくす)。
- 無認可や24時間保育は高すぎる。
- 学童保育の費用が高い。他県との格差がある

1.1.3 教育費など
- 教育にお金がかかりすぎる。
- 子育てはお金がかかる。

1.1.4 税制・手当て
- 税金をもっと安くして欲しい。
- 子育て減税があると良い。
- 児童手当を、小学校卒業まで延長をしてほしい。
- 親に、政府が給料を払う位のことが必要。
- 母子家庭の援助基準が厳しい。
- 母子家庭・父子家庭の援助基準がおかしい。。

1.1.5.経済に関るその他
- 経済的に苦しい
- ローンの返済がある。
- 仕事が不況。

1..2.就労環境
1.2.1.育児休業制度
- 育児休暇をもう少し長く取りたい。
- 産休・育休制度を拡大し、休業中の保障があるとよい。
- 子どもの病気時に休める体制がほしい。
- 男性にも育児休暇を義務付けるべき。

1.2.2残業・時短
- フレキシブルな勤務時間制に
- 残業で二重保育を強いられた。残業のない労働条件の整備が必要
- 勤務時間の短縮を検討して欲しい。

1.2.3.雇用の安定・再就職保障
- 子育て後再就職できるとよい。
- 復職できるとよい。
- 自分の将来が心配だ。

1.3.生活環境（公的）
1.3.1.保育環境
- 保育園が少ない
- 保育園の充実･拡大（制約、制限が多すぎる）
- 企業内保育園があったほうがよい
- 土日、祭日も保育をして欲しい。24時間保育を望む
- 安心して子どもを保育してもらえる環境が欲しい。
- 障害児は保育所に入りにくい。
- 保育者の増員。細かい事に気配りできず気の毒。
- 病児保育に早く取り組んで欲しい。園に併設して欲しい。
- 保育園、学童保育の時間を延長して欲しい。
- 0歳から預かる延長保育のある保育園がもっと必要。
- 一時預かりなど、気軽に預けられる託児所を充実して欲しい。
- リフレッシュや趣味のために子どもを預けられたらよい。
- 保育園・学童保育は本当に必要な人に利用されるべき。

（表2 のつづき）
1.3.2.公共施設（公園・病院・学校）の整備
- 子どもと一緒に出かけられる場所が少ない。
- 広い自由な公園がほしい。公園を増やして欲しい。
- 児童館など公共施設は自由に使わせて欲しい。
- 児童館の会館時間延長を希望。
- 地方も改善して欲しい。（公園・育児サークル・子ども向けの習い事がない）
- 図書館・病院が近くに欲しい。
- 男子トイレにオムツ交換用ベッドを設置して欲しい
- 自転車やベビーカーなどが、安心してで通れる道路を作って欲しい。

1.3.3.制度やサービスの拡充
- 障害者も高齢者も安心して過ごせ暮らせる社会であれば、子を産もうとする。障害児も共に暮らせる地域作り。
- ＰＴＡ活動、地域活動等、子どもを持つために課される社会的負担はきびしい。税金を上げてもサービスを充実させて欲しい。
- 子どもに負担のかからない年金制度を。
- 専業主婦は優遇されている。
- 専業主婦も支援して欲しい。

1.4.生活環境（私的）
1.4.1 住環境
- 住宅が狭い。住宅面から親との同居も出来ず子育てしにくい。
- 周りに気兼ねせずに子どもがのびのびと生活できる住環境が必要

1.5.その他
- 手をつけてない自然を残してください。
- 環境汚染が心配である。
- 国や社会は何もしてくれないことが分かった。

表3．精神・風土の環境（ソフト領域）の記述例

2.1.社会全体・地域社会
2.1.1.差別的風土
- 子育ては母親の仕事という社会の意識改革が必要。
- 母子家庭で仕事をするにも差別される。未婚の母でも平等に扱って欲しい。
- 社会の中での女性の立場が弱い。
- 知的障害の息子に社会はまだまだ冷たい。

2.1.2.子どもや子育中の親への理解・配慮の不足
- 地域ぐるみで支援して欲しい.。
- 学童（保育）に対する地域の理解がない。
- 男性側の無理解。女性だって疲れるし、ゆっくりしたい。

2.1.3.行政窓口の対応
- 対応が冷たく、傷ついた。
- 母親は仕事を止めろと言われた。
- 離婚したら妊娠は中絶すべきと言われた。

2.1.4.社会不安
- 情報化社会の弊害
- 学歴・学力偏重社会
- 暴力・犯罪の不安

2.1.5.教育力・養育力
- 地域や社会全体で子どもを育てようという気持ちが低下している。
- 無責任な親が多すぎる

2.2 企業内
2.2.1 子育てに不利な慣行・風土
- 出産後、育休を取る事の非現実性。（周囲の目が気になる。自分自身がおいていかれる。）

(表3のつづき)

- 子どもがいると再就職が難しい。
- 妊娠・出産・学年行事などに、もっと仕事を休み易い社会が欲しい。

2.2.2 女性の置かれている環境

- 妊娠中は普段と同じように働けない事を理解して欲しい。
- 企業は男性優位である。

2.2.3.男性の置かれている環境

- 夫が妻を援助したくても、一般企業は利益優先で時間的に無理。
- 父親が育児参加できるような社会環境をつくってほしい。

2.3.家族・家庭

2.3.1.夫婦の関係

- 夫が育児を分担してくれない。
- パートナーが未熟で、すべて一人で負担せざるを得ない。

2.3.2.親（子どもの祖父母）との関係

- 子どもの世話を感謝しているが、見返りの期待されている
- 価値観や育児方針が一致しない。
- 子育てより親に対しての悩みが多く精神的にもまいる。どこか相談できるとこがあれば知りたい。
- 親との同居では、気をつかうところが多いが、これも自分の仕事を続けていくためと思っている。

表4　子育てに関する悩みなど否定的記述例

- 今の経済社会状況では、精神的余裕がなく子育てを楽しめない。
- 2人の子どもがいるが子どもが好きになれない。
- 子どもを持つことがハンディと感じる。子どもがいるからこんなに得をすると感じられると良いと思う。
- 子どもは沢山欲しいが預ける大変さを思うとつくれない。
- 子どもはいないほうが楽。少ない方が楽と考えてしまう。
- 子育てに対して自己嫌悪を感じている。子どもは2人欲しいが、今の状況だといらない。自分の時間が欲しい。
- 子どものしかり方が分からない（父として）。
- 金銭的にゆとりがないからイライラする。長女に悪いと思いながら手をあげています。
- 親に休みを与えない子どもなんて、いないほうがいい。行政、社会は全く協力的ではない。
- どんな子にも存在価値はあり、いとおしく可愛いのだが、有形無形の負担を思うと次の子どもを産みたい気持ちにストップがかかる。
- これからの生活に不安だらけで子どもを持ちたくなかったと思う。私達はこのまま生活していて大丈夫か。

表5　育児と仕事の両立の悩みに関する記述例

- 共働き状態の維持と子育ての充実に悩む。
- 仕事と子育てを天秤にかけてしまう。子どもを持つか否かも迷い、職場への迷惑を考えてしまう。
- 子育て中の就業について改善の必要があると思う。仕事も大事だが、両親、特に母親が家にいることも大事だと思う。
- 仕事は自分自身の生きがいでもあるのに、母親は子どものために我慢を強いられる。
- 出産は自分が子どもの犠牲になるか、子どもが自分の犠牲になるかどちらか。やり直せるなら、私は多分子どもは産まない。
- 子どもは兄弟を欲しがっているようで可愛そうだとうが、働いている事に充実感を感じているので、もう一人産む事はとても考えられない。
- 子どもが病気の時に休まなければならないので、重要な仕事からははずされている。精神的自立のため続けたい。

表6　子育ての楽しさや喜びについての記述例

- 子どもとの沢山の楽しい出来事に感謝。子育てで、親として学ぶ事は多い。
- 子どもは家庭に幸せを運んできてくれる。
- 大変だが毎日がたのしい。
- 家に帰ってくるのが楽しみ。
- 子どものいる暮らしは、喜びや豊かな感情に恵まれる。社会全体は子どもとの生活にマイナスイメージを持っていると思う。
- 子どもを産めた事に感謝している。
- 子どもは宝物。子育てしやすい社会を。
- 子ども産んでよかった
- 小さい子どものいる暮らしは何もなくても楽しいし喜びに満ちている。
- 子どもを産み育てると言う事は、独身では経験できない広い世界を見せてくれ、すばらしい事。
- 独身時代「子どもなんてうるさいだけ」と思っていた私に、心の豊さ、喜びを与えてくれた。
- 2度と帰ってこない子育ての時間を楽しみながら共に成長したい。
- 成長するにつれ、苦労を忘れるほどの幸せをくれる。
- 経済的に苦しい事は、苦にならない。
- 「子どものために」と思わず、「子どもといる自分のために」と思うようになった。子育てで、少々仕事や家事を犠牲にしても仕方ないと思うようになった。
- 子育てで毎日忙しいが、忙しいのがすごく楽しいし、子どもとか家族ってすごく生きる励みになる。
- 保育所へ預けているおかげで、仕事も思いっきりでき、帰って子どもと思いっきり遊ぶ。毎日充実している。
- 弟妹はお姉ちゃん（障害児）にとてもやさしく、子育てに生きがいを感じる。
- 子どもと一緒に親も成長した。何も知らなかった分、他の子と比べたりする事もなく安心で楽しい。
- 子どもが4人いるが、上が下の面倒を見ることが自然に出来る。
- 子どもの顔を見ていると辛いことも苦しいことも忘れさせてくれる。

C－2 平成11年度「子育に関するアンケート調査」結果

1 調査の目的

前項 C-1 平成 10 年度「子育に関するアンケート調査」自由記載の分析で抽出したキーワードのうち、「保育園における保育の内容と質」「養育者への精神的サポートのあり方」などに焦点を当て、今後の子育て支援のハード・ソフト両面の方向性について検討することを目的とした。

2 調査方法と対象

1)調査内容

調査の内容は以下の通りである。

(1) 対象の属性
(2) 対象者の子ども（保育園児)の属性
(3) 子どもに関する気がかりとその相談先について
(4) 子どもの発育・発達に関する知識を得る機会について
(5) 保育園のあり方に関する満足度と要望について
(6) 保護者と保育園の連携について
(7) 親自身（対象者)の生活と心の状態について
(8) 対象者が自分の性別をどのように受け止めているかについて
(9) 親と子にとって必要な社会的支援について

2) 調査方法および対象

保育園に子どもを通わせている保護者を対象として、施設における留め置き法によるアンケート調査(一部、郵送による個別回収)を行った。

調査票配布数は 4,112 世帯であった。在園児の各世帯に「父親用調査票」および「母親用調査票」を各 1 部計 2 部ずつを配布し、一人親であることが分かっている家庭には、いずれか 1 部を配布した。なお、調査票の内容は父母共通とした。

調査場所の選定は有為抽出法により、首都圏および中核都市を中心に、人口増加率、生産人口割合、産業構造などを考慮し、今後の出生率増加が期待できると考えられる活力ある地域とした。この場合、各地域内では可能な限り、乳児保育や延長保育など多角的に保育を行っている施設を選び、多様な家庭が対象になるよう配慮した。調査協力を得られた施設、全国 61 ヵ所（公立 2・私立 59)を対象とした。調査場所リストは本稿末尾の資料編に掲載した。

3)回収率および対象の内訳

回収したアンケートは世帯数で 2,862 世帯（回収率 69.6%)、有効回答者数 5,059 人（男性 2,276 人,女性 2,783 人)であった。世帯数の内訳は二人親世帯 2,412（84.3%)、父子世帯 31（1.1%）、母子世帯（13.4%）、不明35（1.2%）であった。

回答のあった 2,862 世帯うち、父母ともに回答が 2,197 組、2 人親世帯の男性のみ回答が 23 名、2 人親世帯の女性のみ回答が 228 名、1 人親世帯の男性が 31 名、女性が 348 名であった。婚姻関係が不明の単独回答者は男性 25 名、女性 10 名であった。全体の男女別集計には、以上のすべての回答者を含め以後、対象または父親・母親と称す。対象の属性については資料編（表 22～26）を参照されたい。

3 結果と考察

1）子どもの心身および発達上の気がかりなことと相談先について

（1）対象者の子ども（保育園児）の属性

- 性別：男児 1.458 人（50.9%)、女児 1,402 人（49.0%)、不明2（0.1%）
- 年齢：0 歳3.2%、1 歳18.3%、2 歳19.1%、3 歳20.7%、4 歳15.2%、5 歳14.7%、6 歳8.4%であった。平均年齢3.04 歳であった。
- 世帯ごとの子ども数は、1 人42.0%、2 人40.8%、3 人 13.7%、4 人 1.9%、5 人以上 0.2%であった。出生順位は第一子が 38.1%、第二子が 36.7%、第三子が 11.6%、第四子 1.6%、第五子以上が 0.2%であった（表1～3)。

（2）子どもの心身および発達上の気がかりなことの有無について

- 「気がかりなことがある、または過去にあった」親の割合は 40%であり、母親が父親に比べその割合が高い（父親36%・母親43%)。
- 気がかりなことの内容別にみると、身体上のことが54%・情緒などが32%であり、栄養のことなどが8%、発達上のことは7%である（表4)。

（3）気がかりなことの相談先とその満足

- 気がかりなことについて専門家の治療や相談などを受けたことある親の割合は 57%であり、母親のほうが父親に比べその割合が高い（父親 50%・母親61%)。
- 親の 77%（父親 81%・母親 75%）が小児科医にみてもらっており、診てもらった親の 77%（父親 75%・

母親 79%）が満足している。

• 小児科医に不満をもっている親は 18%（父親 25%・母親 21%）であり、不満の理由の第一は「不安な気持ちが消えなかった」41%で、次いで「問題解決の糸口が得られなかった」34%である。

• 医師以外の専門家では、保育者に相談をした親が 33%（父親 20%・母親 40%）であり、母親が相談している割合が高い。相談をした親の 79%（父親 71%・母親 82%）は満足している。

• また、その他の相談者に相談した親は 13%、栄養士に相談したのは 9%である。多くは満足しているが、不満であった理由としては、「不安な気持が消えなかった」・「問題の解決の糸口が得られなかった」があげられている（表 4-1～3）。

幼児を持つ親にとって小児科医や保育者は身近な相談者である。そして、相談をした親の多くが、ほぼ満足していた。しかし、気がかりなことがあっても専門家に相談していない親の割合が 43%あり、気軽に相談できる諸環境が十分に整っていないことが考えられる。

また、相談して不満がある場合の理由としてあげられたのは、「不安が消えない」「問題解決の糸口が得られない」「話を聴いてくれない」あるいは「親が悪いように言われた」などがあげられており、相談を受ける専門家は親の不安や心配などを十分に聴く態度を大切にしていくことで、親の不安な気持ちを軽減することができるものと思われる。また、問題の早期発見の見地から、その対応が相談者にとって有効であったかどうかを何らかの方法で確かめることが、問題点をそのままにせず、次の段階の支援につなげることができよう。

2）子どもの発育・発達に関する知識について

（1）知識を得る機会の有無

• 発育・発達に関する知識を得る機会があった父親は 52%・母親は 79%で、母親の方が知識を得る機会が多い（表 5-1）。

• 知識を得る機会がなかった親（1648 人）では、「困ることがあるので知りたい」父親 19%・母親 26%、「困らないが知っていたほうがよい」父親 63%・母親 56%」であった。また、父親の 16%・母親の 15%は「知らなくてもかまわない」と答えていた（表 5-2）。

（2）公的機関の「発育発達に関する知識」の情報提供についての満足度

• 公的機関による「発育や発達に関する知識」について情報提供の方法に満足している割合は、満足とやや満足を合わせて 61%（父親 56%・母親 64%）であった（表 6-1）。

• 不満と答えた場合の情報提供の方法については、「子どもの通っている保育園・幼稚園・学校を通じて提供してほしい」と望んでいる割合が 64%（父親 65%・母親 64%）で最も多く、「個別指導や資料を送付してほしい」が 28%（父親 9%・母 44%）であった。また、「講師や参加者とのコミュニケーションを取りながらの学習会を要望」が 19%（父親 15%・母親 24%）であった（表 6-2）。

知識を得る機会のあった親は、母親の方が多く、父親は約半数であった。また、発育・発達に関する知識を得る機会がなかった親の多くが知識を得たいと思っていることからも、特に男性に対する子どもの発育・発達に関する情報提供の方法を検討する必要があろう。働きながら子育てをしている親に対する情報提供の方法は、親が出向く講演会などではなく、知識や情報を親の手元に送る方法が望まれている。「知らなくてもよい」「自分なりの育児をしたい」と考えている親へのアプローチも含め、身近な保育園の情報提供機能はますますの充実が期待される。また、個別指導を要望している母親の割合が多いことや、コミュニケーションのある会なら参加してもよいと思っている親も少なからずいることを考慮すれば、インターネットなどによる双方向のメディアを使った情報提供の方法も有効と思われる。

3）保育園のあり方に関する満足度と要望

（1）1 クラスの子どもの人数と保育者数

• 現在の子どもの人数は最低基準を満たす結果であるが、親は 1 クラスの子どもの人数は各年齢において現在の子ども数よりも少ないクラス編成を望んでいる。0 歳児では 7 人、1 歳児 8 人、2 歳児 11 人、3 歳児 13 人、4 歳児 15 人、5 歳児 16 人、6 歳児 15 人であり、4～ 5 歳の場合には、現状より 1 クラス 5～6 人少ない子ども数を望んでいる。

• 希望する保育者数は、0 歳児と 4～6 歳児において現在よりも若干多い保育者数を望んでいる（表 7-1～4）。

希望する 1 クラスの子どもの人数は各年齢において現在の子ども数よりも少ないクラス編成を望んでおり、4 歳児から 6 歳児においては現在よりも 5～6 人少ない人数で、なおかつ保育者数を現在よりも多くして欲しいという要望がある。子どもの活動や教育など十分に対応して欲しいという要望があるのではないだ

ろうか。

（2）保育園児の年齢層について

• 0 歳児から就学まで同一施設での保育を望む割合は、父親が 50%・母親が 57%である。

• 0 歳から 3 歳までは同一施設で過ごし、3 歳以上は他の施設での保育を望む割合が父親 29%・母親 20%である。

• 0 歳児から就学後の学童保育まで同一の保育園でという要望が、父親 17%・母親 19%ある（表 8）。

0 歳児から就学まで、あるいは学童保育も同一の保育園で行って欲しいという要望も少なくはなく、子どものことを把握し理解してくれている保育園で継続して保育してもらうことへの期待があると考えられる。また、きょうだいが同じ施設に在籍することは送迎など親の負担を軽減させるものである。

（3）保育園の健康管理・健康支援

• 「健康診断の回数やその内容」・「保育中の病気やけがの対応」については、父親の約 70%が、母親の約 80%が満足している。しかし、「嘱託医など医師との連携」について満足している割合は、父親 57%・母親 62%である。

• 「給食やおやつの内容」ついては、父親の 83%・母親 89%が満足している。「食事指導」に満足している父親は 75%・母親 87%である。

• 「子どもの健康に関する知識の提供」に満足している父親は 64%、母親は 74%である（表 11-1～6）。

保育園の健康管理や健康支援に関しては多くの親が満足しており、特に母親の満足度が高い。母親が保育園の活動等をよく知っているということであろう。健康診断や保育中の対応についての満足度は高いが、医師と連携して子どもの健康管理を行うことに関する満足度はやや低い。病気やけがなど専門的な医療等を必要とする場合、医師との連携が十分ではないということであろう。

（4）通園している保育園で、特別な保育事業を実施することのついての賛否

• 父母ともに賛成が多かった上位 3 保育事業は、「高齢者との交流」父親 75%・母親 85%、「卒園児との交流」父親 73%・母親 83%、「地域の親子への園庭開放」「育児相談」父親 67%・母親 75%である。また、「障害児保育」については母親が 73%、父親は 62%といずれも母親の方が賛成率が高い。

• 父母ともに約 30%の反対があった事業は、「夜間保育」父親 27%・母親 30%、「病児または病後児保育」父親 30%・母親 29%である（表 12、12-1B~9B）。

特別な保育事業を通園している保育園で実施することについて、多くの親が賛成を表明している。しかし、夜間保育や病児あるいは病後児保育に関して反対をする親が約 30%いた。反対理由を質問していないので定かではないが、子どもの立場にたち夜間保育せずにすむように、あるいは病気の時には親が看護できるような雇用制度などの整備を望んでいるとも考えられる。また、現在通っている施設ではなく、別のところでの実施を希望する場合も含まれよう。

（5）保育の内容や、保育者の対応について

• 「子どもの身体の状態に応じた保育者の対応」に満足している割合は、父親 81%・母親 87%で、「生活習慣のしつけ」について満足している割合は、父親 77%・母親 88%である。また、「保育カリキュラム」に満足しているのは父親 81%・母親 84%であり、多くの親は保育者の対応に満足している。

• 「心の状態に応じた対応」についての満足している割合は、父親 75%・母親 78%であり、「子どもの持ち味が大切にされている」ことに満足している割合は、父親 69%・母親 73%である。子どもの個性や心理的な状態に対する保育者の対応については、前述に比べその割合がやや低い。

• 「親の子育てに対する精神的サポート」について保育者に満足している割合は、父親 64%・母親 69%である。保育者は一人一人の子どもや親のこころにそった対応が十分ではないといえる（表 10-1～8）。

• 保育者の「子育て感」や「人権感覚」についての満足度は、父母ともに約 70%である。

• 子どもは機嫌よく保育園に通っているかどうかでは、約 90%の父母が「子どもは機嫌よく保育園に通っている」と回答しており、子どもが保育園の環境に信頼と安心感を持ち、家庭環境も安定していると考えられる割合が高い（表 13）。

保育の内容や保育者の対応について、親の満足度はかなりの割合で満たされていた。不満である場合は、よりきめ細かな個別対応を望んでいる場合であると思われた。

（6）子どもが親と離れて過ごしている時間

• 現在、子どもが親と離れて過ごしている時間は、6 時間未満と答えた父親が 3%・母親が 3%、7 時間が父親 12%・母親 15%、8 時間が父親 22%・母親 28%と 8 時間がもっとも多かった。9 時間が父親 16%・母親 21%、10 時間が父親 20%・母親 21%で、通常の勤務時間に通勤時間を考慮して 8～10 時間子どもと離れている割合が、父親 60%・母親 70%を占める。11 時

間離れている割合は父母ともに 8%で、12 時間以上は、父親16%・母親4%であった(平均時間:父親9.43 ・母親 8.81)。

• 親が希望する時間は、6 時間が父親 7%・母親 12%、7 時間が父親 7%・母親 12%で、7 時間以下の希望が父親 20%・母親 31%である。8 時間が父親 27%・母親 32%で最も多い。8〜10 時間望む割合は父親46%・母親47%と、いずれも現在の時間よりも短時間であること望んでいる傾向がある。他方、11 時間以上という要望は父親・母親ともに 6%であり、「何時間でもよい」との回答は、父親 16%・母親 12%であった(平均時間:父親 8.13 ・母親 7.62)。

• 子どもにとってのよいと思う時間は、父親は 5 時間が 9%、6 時間が 18%、7 時間が 8%、8 時間が 21%である。母親は 5 時間が 14%、6 時間が 23%、7 時間が 13%、8 時間が 22%であった。母親の方が子どもにとっては短い時間がよいとする割合が高いが、父母ともに子どもが親と離れている時間は、現在の時間より短い方がよいと望んでいた。また、親が希望する時間よりも短くなっていた。「何時間でもよい」との回答は、父親 13%・母親 9%であった(平均時間:父親 6.67 ・母親 6.43)(表 9-1〜3)。

現在の生活において、多くの親が子どもと離れている時間は 10 時間以内であり、8〜10 時間が多くを占める。「親の希望」としては、より短時間の方にシフトしており、多くの親は 6〜8 時間がよいと望んでいた。また、「子どもにとって」は 5〜8 時間がよいと思っている親が多く、「親にとって」よりさらに短い方にシフトしていた。いずれも母親の方が父親より、短い時間を望んでいた。親と子が離れている時間は、多くの親が現状より短くなることが「親にとって」も、「子どもにとって」も望ましいと考えており、時間的なゆとりをもって子育てできることを希望している。

4) 保育園との連携

(1) 保育園との連絡や子どもの理解

• 保育園と親の子どものことに関する連絡方法の多くは「連絡帳」約 80%であるが、「面談」もしているという父親が 31%、母親が 45%あった(表 15)。

• 「子どもの様子について園からの連絡内容で分かる」と 83%の父母が回答している(表 16)。

• 「保護者からの連絡内容が保育者に伝わっているか」については、父親 86%・母親 90%がほぼ伝わっていると回答している(表 17)。

• 「子どものことについて保育者と保護者の間での理解が一致しているか」ということに関してもほぼ一致していると父親の 80%・母親の 84%が回答している(表 18)。

(2) 保護者会について

• 「現在、保護者会活動がある」と回答している父親は 60%・母親 67%である。そして「保護者会があった方がよい」は父親 74%・母親 76%である。

• 保護者会の意味については「園との連携が密になり保育に反映できる」と多くの親(父母ともに 85%)が考えている。しかし、保護者会は不要と思っている親(父母ともに 20%)あり、その理由は「保護者の労力や時間的負担が多いこと」を父親 68%・母親 85%があげている。また「保育は園にまかせたほうがよいと思うから」が父親 29%・母親 12%であった(表 19〜20)。

保育園と家庭の連絡はほぼ十分行われており、子どもの理解もほぼ一致している。また、保育に反映できるという理由で、保護者会活動について肯定的である親が多い。親が保育サービスを受けるという、受け身に構えるのではなく、保育園に主体性をもって関ることが、保育園と保護者の連携において重要である。

5) 対象者自身の現在の生活と気持ちについて

育児におけるソフト領域でどのような支援が必要とされているのか、親の生活観や子どもと過ごしている時の気持ちなどを設問した。ここでは全体の傾向を述べ、「自分は親としてよくやっていると思う群」と「思わない群」のクロス集計結果については後述する。

(1) 子どもと過ごしているときの気持ち

• ほとんどの親が「充実感があって楽しい」「子どもから安らぎを得られる」「面白いことや発見がある」と「いつも」または「時々そう思う」いう肯定的感情を持っていた(いずれも 90%以上)。

• しかし、否定的感情も時には持つ親も多く、「大変でどうしたらよいかわからない」と時々そう思う父親 28%・母親 37%、「煩わしくていらいらする」父親 30%・母親 47%、「子どもと一緒にいるのことがいやになる」父親 9%・母親 17%であった(表 33)。

(2) 自尊感情

• 「自分が好き」と答えた父母はともに 51%であった。父親が肯定する割合が高かった項目は「自分には能力がある」父親 42%・母親 29%であった。全体の傾向としては、「自分は親としてよくやっている」父親 46%・母親 42%など父母の差は小さかった(表 36)。

(3) 生活における仕事と育児のバランス

• 仕事と育児のバランスでは、現在「どちらかとい

うと育児より仕事に比重がかかっている」が男性38%・女性 35%と最も多かった。「育児より仕事中心」は男性は 34%と多く、女性 7%であった。「バランスがとれている」は男性15%、女性25%に留まっていた。

• 希望としては男女とも約 60%が「バランスがとれている」状態を望み、育児に重きを置いた生活を望む割合は男性 16%・女性 30%と女性が多く、仕事に重きを置く生活は男性 17%・女性 4%に希望が多い傾向であった（表34）。

（4）仕事の充実感と収入のバランスについて

• 収入と仕事のやりがいのバランスでは、現状・希望ともに「バランスがとれている」状態が最も多く、現状では男性 31%・女性 34%、希望では男性 58%・女性 64%であった。

• 仕事にやりがいを求める傾向は男性 16%・女性 12%とやや男性が多いが、全体としては現状・希望ともに男女の差が小さかった（表35）。

（5）親（祖父母）からの援助

• 経済的援助は「かなり」8%、「少し」19%で 27%の親が援助を受けていた。

• 家事などについては、「かなり」11%、「少し」18%で 29%の親が援助を受けていた。

• 子どもの世話については「かなり」20%、「少し」36%で 56%の親が援助を受けていた（表27）。

（6）家庭の経済状況

• 現在の経済状態をどのように思うかでは、「ゆとりがある」6%、「ややゆとりがある」17%、「普通」38%、「やや苦しい」25%、「苦しい」13%となっており、全体では、普通以上が60%である（表37）。

（7）心の状態

• 「ゆとりがある」と答えた父親は 6%・母親 5%、「ややゆとりがある」は父親 16%・母親 16%、「普通」は父親 39%・母親 31%、「ややゆとりがない」は父親 27%・母親 34%、「ゆとりがない」はや父親 11%・母親 14%であった。

• 経済状態との関連でみると、「経済的に苦しく、かつ心にゆとりがない」父親は 5%・母親 6%であり、「やや苦しい」「ややゆとりがない」をふくめると父親 22%・母親25%である（表38）。

（8）生活の満足度

• 現在の生活に満足している父親は 19%・母親は 15%、やや満足しているは父親 39%・母親 38%、やや不満は父親 15%・母親 19%、不満は父親 7%・母親 8%であった（表39）。

6）現在の生活において、自分の性別をどのように受け止めているか。

• 自分の性別でよかったとした父親は 63%・母親は50%であった。どちらかというとよかったを含めると父親の 79%母親の 72%は自分の性を肯定している（表40）。

• 自分が男性であることまたは女性であることをよかったと思うのはどのような場合か複数回答で設問した。「体力・パワーがある」父親 43%・母親 8%、「行動力がある」父親 26%・母親 9%、「雇用や職場において優遇される」父親 20%・母親 6%など、ほとんどの項目で父親が選択した割合が高かった。「妊娠・出産できる」を除けば、母親が父親より高い割合で選択した項目は「差別される立場や弱者の視点で考えられる」（父親 7%・母親17%）のみであった（表41）。

• 自分が男性であることまたは女性であることをいやだと思うのはどのような場合かでは、母親の方が多くの項目を選択した。「雇用や職場において差別される」父親 3%、母親 34%、「社会（しきたりや慣習）で差別される。」父親 6%・母親 33%、「同性の考え方や行動パターンがいやに思う」父親 7%・母親 24%などである。父親の方が高い割合で選択した項目は「家族の期待に応えなくてはならない」（父親 15%・母親 8%）であった。

自分の性別を受け入れないという程否定的な人は少ないが、後述する未婚者に比べて多くなっており、結婚生活とその後の仕事しながらの育児経験などの影響が考えられよう。女性であることがいやだと思うことは男性のそれに比べて非常に多く、職場や社会における性差別を母親の 1/3 が感じていた。父親は「家族から期待をかけられる」ことで男性でよかったと思う反面、「家族の期待に応えなくてはならない」ことをいやだ感じる場合があり、両性ともに、生きにくい環境が社会及び家庭に少なからずあることが分かる。

7）対象者（保護者）が育ってきた家庭環境や家族の様子

• 育ってきた家庭について「満足している」父親は69%・母親は 67%であった。不満は父親 12%・母親 18%であった（表31）。

• 将来、育った家庭のような家庭を築いていきたいと思うかどうかでは父親の 49%・母親の 48%が「そう思う」と答えており、「そう思わない」は父親 30%・母親34%であった（表32）。

自分が育ってきた家庭については、約 70%の親が

満足していたが、育った様な家庭を築いていこうとする割合は約 50%であった。現在の親たちの中には、自分たちの価値観で新しい家庭を築いていこうとする意識があることが伺える。

8)「親としてよくやっていると思わない」群の特徴について

「自分は親としてよくやっていると思う群」父親 1052 人（56%）・母親 1171 人（42%）と「思わない群」父親 410 人（18%）・母親 535 人（19%）を対象に（表 36－7)、現在の生活および育った家庭の状況などについてのクロス集計を行い、親としての自信がもてないことの背景について検討した。以下「思わない群の特徴」を述べる。始めに「思わない群」の割合を示し、（　）内に「思う群」の割合を対照させて記す。いずれも危険率 1%で有意な差が認められた項目である。

• 子どもに関する気がかりなことのある割合が高い。父親 43%（33%）・母親 55%（38%）

• 子どもの発育・発達に関する知識を得る機会は「なかった」割合が高い。父親 56%（43%）・母親 27%（15%)。

• 子どもと過ごすときの気持ちでは、肯定的な項目で「そう思う」割合が低く、否定的な項目では「そう思う」割合が高い。肯定的項目で「いつも思う」と答えた割合でみると「充実感があって楽しい」父親 38%（60%）・母親 24%（52%)、「やすらぎが得られる」父親 41%（62%）・母親 32%（57%)、面白いことや発見がある」父親 54%（67%）・母親 50%（73%）であった。否定的項目の「時々思う」では「煩わしくていらいらする」父親 36%（28%）・母親 62%（39%）などであった。

• 自尊感情は低い傾向がある。「自分が好き」に「そう思う」と答えた父親 36%（66%)、母親 32%（69%)。「魅力がある」「能力がある」でも同傾向がみとめられ、「取りえのない人間だ」19%（11%）・母親 31%（12%）となっている。

•「仕事と育児のバランスの現在の状態」では「仕事に比重のかかっている」または「仕事中心」の割合が高い。父親 88%（65%）・母親 54%（34%)。そして「仕事と育児のバランスがとれている」と答えた割合が低い。父親 6%（20%）・母親 15%（29%)。

• 仕事と収入のバランスについては、「バランスがとれている」と答えた割合が低い。父親 25%（35%）・母親 29%（37%)。父親においては「やりがいを優先させている」割合が高い。48%（35%）

• 現在の経済状態では「苦しい」と答えた割合が高い。父親 51%（31%）・母親 47%（35%)。

• 心の状態では「ゆとりがない」と答えた割合が高い。父親 58%（30%）・母親 70%（30%)。

• 現在の生活の満足度では「不満」と答えた割合が高い。父親 38%（17%）・母親 43%（20%）

• 自分の性（別）の受け入れでは「自分の性でよかった」割合が低い。父親 77%（84%）・母親 61%（79%)。

• どのような場合自分の性がよかったと思うかでは、次の項目で選択した割合いが低い。「体力・パワーがある」父親 41%（50%）・母親 5%（10%)、「行動力がある」父親 22%（30%）・母親 7%（12%)、「養う力がある」父親 15%（23%)、「女らしさを備えている」母親 4%（11%)、「女は妊娠・出産できる」母親 60%(70%)、家族から期待をかけられる」父親 14%（20%)。

• どのような場合自分の性がいやだと思うかでは、母親のみ次の項目で選択した割合いが高い。「家庭の中で差別される」22%（16%)、「能力がない」8%（5%)、「体力・パワーがない」26%（20%)、「養う力がない」25%（16%）「家族の期待に応えなくてはならない」13%（8%）「女らしさを要求される」23%（13%）「妊娠・出産できる」9%（2%）

• 育った家庭の雰囲気では、家庭の開放性、柔軟性、ユーモアや安らぎの有無などにおいて、「そう思う」と答えた割合が低い。「変化に柔軟に対応できた」父親 59%（69%）・母親 54%（71%)、「ユーモアや安らぎがあった」父親 56%（66%）・母親 60%（69%)、「家族の関係がうまく行っていた」父親 53%（73%）・母親 54%（71%）などである。

• 対象者が育ったころの両親については、「協力的で、価値観や教育方針が一致しており、穏やかな仲の良い夫婦であった」という印象をもつ割合が低い。「助け合い協力していた」父親 54（68%）・母親 42%（65%)、「教育方針が一致していた」父親 33%(50%)・母親 41%（56%)、「仲の良い夫婦だった」父親 51%（64%）・母親 46%（60%）などである。

• 育ったころの両親の関わり方では、「尊重された」などの印象を持つ割合が低い。「父に尊重された」父親 41%（48%）・母親 40%（52%)、「父は気づかってくれた」母親 45%（57%)、「母に尊重された」父親 54%（64%）・母親 52%（66%）などである。両親の関わり方では、その他の項目でも割合が低い傾向があり、両親からの関りが相対的に少ないといえる。

• 育った家庭に満足しているかどうかでは、満足度が

低い。満足していると答えた男性 65%（76%）・母親 57%（73%）。

• 自分が育ったような家庭を築きたいかでは、そう思う割合が低い。父親 39%（54%）・母親 57%（73%）。

親としてよくやっていると思えない群の特徴は、以上のように多領域に見いだされ、親としての自信が持てない理由には多くの要因が関連していることが推察される。

まず、子どもに関する気がかりなことがあり、発育発達に関する知識を得る機会があまりなかった、という「子育て上の条件」がある。また、経済的に苦しく、仕事と育児のバランスがとれていない、心のゆとりがなく、現在の生活に満足していないという、「現在の生活の条件」、自分の性を肯定的に受け止められない・自分が好きでないなど「自己肯定感の問題」、育った家庭や両親の関りから推察される家庭や夫婦像・親役割に関する「モデルや伝承の問題」などがあげられる。

このような場合の親への支援は「子育て条件」「現在の生活の条件」はハード領域の支援サービスが行われることが有効であろうが、「自己肯定感の問題」「モデルや伝承の問題」はソフト領域の課題である。

自分の性をいやだと思う母親は「女らしさを要求される」「家庭の中で差別される」「家族の期待に応えなくてはならない」を選択した割合いが高かった。社会や職場での差別については、親としてよくやっていると思う群とそうでない群の間で差がないことから、親としての自信は家庭における性役割規範のプレッシャーや個人における性役割の受け入れの問題に関連していると考えられる。個が自己肯定感をもてる家庭環境、それをサポートする教育・社会環境が大切である。

「モデルや伝承の問題」は現時点ですでに、次世代の親（子どもたち）への影響が及んでいるということを示唆している。すなわち、性別役割分担の問題を含めて、家庭および社会環境を整え現在育児中の親を支援することは、今子どもである次世代の親を育む作業でもあるという意味で重要といえるのである。

9）親と子にとって必要な社会的支援

（1）育児支援サービス・配慮して欲しいこと

• 「利用した」または、「今後利用したい」支援サービスは「土曜・日曜に利用できる行政窓口やサービス」が父親 73%・母親 80%と最も希望が多かった。「家庭の事情を配慮した地域組織の運営（当番や役員）も希望が多く父親 52%・母親 60%であった。

• 「子育てに関する相談」父親 57%%・母親 62%、「仕事や家族の相談など親個人への精神的サポート」父親 43%・母親 59%、ベビーシッターや保育園の送迎に 50%と希望が多かった。育児のヘルパーは 42%、家事のヘルパーは 33%であった。

このように、直接的な育児の支援の必要性が確認できるが、それを上回って、行政サービスや地域組織の運営といった面での、生活基盤の利便性が求められていた。育児中の親のサポートで育児以外の面の負担を軽減するという発想が重要である。また育児相談に止まらない、親の個人としての問題への対応が求められており、多方面の専門家による相談体制が必要である。

（2）利用料について

• シッターの派遣については「ある程度負担してもよい」が 54%と「無料がよい」20%を上回っていた。他に、「ある程度負担してもよい」の割合の高い項目は「家事ヘルパーの派遣」41%、「保育園の送り迎え」34%であった。一方「育児相談」「親の精神的サポートでは「無料がよい」が過半数のそれぞれ 63%と 54%を占めており、「ある程度負担してもよい」はそれぞれ 9%と 10%であった。

育児や家事の支援という代替機能（いわばハード領域）にはお金をだすが、ソフト領域である精神的サポートにはお金を出したくないという傾向がみられる。これは、現在の親に対する精神的サポートのあり方に「少し先輩の親がボランティアで悩みのはけ口になる」といった発想であることが理由の１つではないだろうか。精神的サポート体制が「親のライフコースやライフデザインを考える手助け」といった専門性を備えた場合、ある程度の料金設定が受け入れられる可能性はあろう。しかし、現時点では若い世代が初めての子育てを行う（危機的状況に陥る可能性のある）時期の精神的支援の必要性と重要性を親自身がより自覚し、困った時は積極的に各種サービスを利用することが望ましく、そのためには料金など運用面で利用しやすいサービスが提供されなければならない。

以上から、親が必要としている支援は育児への直接的支援（代行サービス）とともに、精神的サポートや生活の利便性を高めることであるいえる。

4. 小括

1）子育支援のニーズと実態

（1）子どもに関する相談体制

父母にとって、保育園や小児科医は身近な相談相手であり、対応についての満足度も高い。満足が得られない場合の理由は「解決の糸口が見つけられなかった」

「不安な気持ちが消えなかった」が主であった。このようなケースの中には問題が解決せず深刻化する可能性が考えられ、ファースト・エイドの重要性を再確認する結果であった。

(2) 情報提供

子どもの発育発達に関する知識を得る機会は十分ではなかった。特に父親は知識を得る機会が不十分であった。知識の提供は「保育園を通して」と「個別に対応」という希望が多く、保育園は情報拠点として、父親を視野に入れた役割機能の充実が期待される。

(3) 保育内容

子どもの発育発達保障の根幹となる健康・安全に関する保育園の対応について、親の満足度が高く、保育者の対応についてもおおむね満足している親が多かった。機嫌よく保育園に通っている子どもの割合が約90%であったことにも、親子ともに安心して保育園を利用している様子が伺えた。一方、保育内容に関する不満は各項目 10%程度みられ、より細かな対応が必要なケースがあるものと思われる。そのためには、子どもの人数に対する保育者数の検討も必要となろう。保育内容に関する満足度は母親が父親に比べて高く、父親は「どちらとも言えない」が多い。保育園と関わりにおける父母の差と言えよう。

保育園で行われてる特別な事業については、父母ともに園外との交流に賛成が多く、母親はより積極的であった。開かれた保育園としての展開を在園中の親も望んでいることが分かった。

(4) 保育園との連携

子どもに関することの連絡の方法は、連絡帳や面談などでとられており、保育園と保護者の子どもに関する理解はほぼ一致していた。保護者会については、「園との連携が密になり、保育に反映できる」と言う理由で、父母ともにある方がよいという意見が多かった。一方、保護者会に否定的な群では「保護者の労力や時間的な負担」が主な理由としてあげられ、「保育は園に任せたほうがよいから」とした親も若干みられた。

保育がサービスとして供給される時代を迎え、保護者の自主運営による共同保育の時代に比べ、保護者の意識は、今後さらに大きく変化していくことであろう。平成 11 年度改訂された保育所保育指針にあげられた保育園と家庭との連携は、保護者が子どもの発育発達を保障する環境の構築に主体的に関わるために不可欠である。しかし、保育園を利用しているがために増える「保護者の労力や時間的な負担」または「負担感」とどう折り合いを付けていくかが課題である。

(5) 育児支援サービス・配慮して欲しいこと

ベビーシッターや育児相談などの直接的な育児の支援の必要性は高いが、それを上回って、行政サービスや地域組織の運営のあり方といった、生活の基盤の利便性が求められていた。また「仕事や家族の相談など親個人への精神的サポート」も半数の親が望んでいた。子育中の親や家庭支援において、育児以外の生活面の負担を軽減するという発想が重要である。

2) 子育中の親の気持ちとその背景

「自分は親としてよくやっていると思う群」と「思わない群」ついてのクロス集計を行い、親としての自信がもてないことの背景について検討した。

親としてよくやっていると思えない群の特徴は、まず、子どものことに関する気がかり・発育発達に関する知識を得る機会の不足などの「子育て上の条件」がある。また、経済・仕事と育児のバランス・心のゆとり・現在の生活の満足感など「現在の生活の条件」、自分の性を肯定的に受け止められない・自分が好きでないなど「自己肯定感の問題」、育った家庭や両親の関りから推測される「親モデルや子育てモデルの伝承の問題」などがあげられる。

以上の結果から、現在育児中の親への支援は、直接的な育児支援（ベビーシッターなどの育児代行）の他、親が主体的に育児に関わることができるような生活環境を整えることおよび、精神的サポートが重要である。

1) 行政サービスなどの生活環境は働く親にとっての利便性を高め、育児以外の労力負担を軽減する方向性が必要である。

2) 育児相談のみならず、親個人の問題をサポートし、ライフデザインの手助けとなるような、多方面の専門性をもった相談体制が必要である。

社会環境を整え、現在育児中の家庭を支援する内容は、次世代の親を育むという方向性をもってこそ、長期視野にたった少子対策といえる。すなわち、現在育児中の親が個人として充実し、親として成熟し、家庭が機能するような支援システムが次世代の育成へと繋がるのである。

謝　辞

調査にご協力頂いた全国の保護者各位と保育職各位に深謝申し上げます。また調査票作成にあたって、助言を頂いた和泉短期大学の窪龍子教授に深謝申し上げます。

（齋藤幸子・千賀悠子・宮原　忍）

C－3　平成11年度「非婚・晩婚化傾向に関するアンケート調査」結果

1　調査の目的

平成10年度「子育に関するアンケート調査」では、価値観の継承について調べ、子育中の親が上の世代からどのような価値観を受け継いでいるのか、次世代にはどのような価値観を受け継ごうとしているのかを明らかにした。本年は未婚者における上の世代から価値観の継承、および未婚者が次世代へ伝えたい価値観について調べ、結婚観・家族観・子育て観との関連をみる。併せて、自尊感情、自分の性別をどのように感じているか、育った家庭環境などについて調べ、社会的環境が現在の青年の価値観に及ぼす影響について検討する。次世代の育成へと繋がる社会環境あり方を考察し、施策への提言を行うための資料収集を目的とした。

2　調査方法と対象

1）調査内容

調査の内容は以下の通りである。

（1）対象の属性
（2）結婚観・家族観・子ども観などについて
（3）性別の受容と自尊感情
（4）生活の満足感
（5）育ってきた家庭環境と親との関係
（6）価値観の世代間継承

2）調査方法および対象

企業で働く主に20～30代の人を対象として、留め置き法によるアンケート調査（一部、郵送による個別回収）を行った。調査票配布数は1,234であった。調査場所は、首都圏が482、中部・関西が577、その他の地域が175であった。調査場所リストは本稿末尾の資料編に掲載した。

3）回収率および対象の内訳

有効回答数1,053（男性437人,女性616人）であった。回答のあった1,053例のうち、未婚で記載不備のなかった男性161例・女性353例、計514例を集計対象とした。未婚の男女別に検討を行った。また、内容によっては次の二群別に検討をした。結婚願望を表明している対象を結婚積極群（男性80例・女性176例）とし、結婚にあまり積極的ではない対象を結婚消極群（男性80例・女性173例）としてこれら2群の比較を行った。

3　結果と考察

1）対象の属性

（1）性別と年齢層

年齢層は、19歳以下（女性0.3%）、20－24歳（男性24%・女性40%）、25－29歳（男性5%・女性44%）、30－34歳（男性19%・女性12%）、35－39歳（男性4%・女性4%）、40歳以上（男性3%・女性0.3%）である。

（2）学歴

・男性：大学卒以上が74%、専門・専修・短大・高専卒19%、高校卒8%である。
・女性：大学卒以上が38%、専門・専修・短大・高専卒57%、高校卒5%である。

（3）世帯

・男性：一人暮らしが76%、親との同居19%、恋人との同居4%、その他3%である。
・女性：親との同居が58%、一人暮らし34%、その他5%、祖父母との同居5%、恋人との同居3%である。

（4）職業

・職業：男女共に常勤勤務者が多く、男性92%・女性93%で、非常勤および学生が若干名である。
・職種：男性は、営業・販売が最も多く42%で、次いで事務24%・サービス業20%である。女性は事務が最も多く36%で、次いで営業・販売26%、サービス業15%、専門職15%である。

（5）昨年度の年収

・男性：100～400万円未満が最も多く58%、次いで400－700万円未満で30%、700～1000万円未満が7%である。
・女性：100～400万円未満が最も多く83%、次いで400～700万円未満が11%である。なお、100万円未満が3%で、無収入が2%である。

（6）親からの援助

・男性：親から経済的援助を受けている割合は15%、日常的生活の援助を受けている割合は14%である。
・女性：経済的援助を受けている割合は37%、日常的生活の援助を受けている割合は45%である。

女性の方が親から経済的あるいは日常生活の援助を受けている割合が高い。女性は親との同居の割合が高いこともあり、親からの援助が多いと考えられる。

2）結婚観・子ども観・子育て観・性別役割観について

（1）結婚願望－結婚積極群と消極群

・結婚積極群：「結婚するつもりの相手がいるので、

いずれ結婚したい」という結婚予定者は、男性 32%・女性 28%である。また、「結婚相手はいないが、ある程度の年齢までには結婚がしたい」という結婚願望のある割合は、男性 17%・女性 22%である。このように結婚の意志のある人を「結婚積極群」とすると、積極群は男性 80 例（50%）、女性 176 例（50%）である。

・結婚消極群：「理想的な相手がいれば、結婚したい」割合は男性 43%・女性 44%で、「結婚はしたくないが、パートナーとなる人が欲しい」は、男性 6%・女性 5%である。また、「一生結婚するつもりもないしパートナーとなる人もいらない」割合は男女ともに1%である。このように結婚に対して消極的な人を「結婚消極群」とすると、消極群は男性 80 例（50%）、女性 173 例（49%）である。

男女共に結婚積極群および消極群は各々約 50%である。男性の消極群の方が高年齢層の割合が高い。女性の積極群の方が常勤および専門職の割合が高い傾向がある。

（2）結婚観

・「結婚することによって、より充実した人生を送ることができる」と思う割合は、男性 53%・女性 51%で、どちらとも言えないという男性が 35%・女性 37%である。結婚によって充実した人生が送れると思っている男女は約半数であり、男女間に差異はない。

結婚積極群・消極群別にみると、「結婚によって充実した人生が送れる」と思っている割合が、積極群の男女では共に 61%である。

・「男性は結婚しなくとも充実した人生が送れる」と思う割合は男性 32%・女性 39%で、そうは思わないという男性が 33%・女性 20%である。

・「女性は結婚しなくとも充実した人生が送れる」と思う割合は、男性 34%・女性 37%、そうは思わないという男性が 31%・女性 20%、どちらとも言えないが男性 34%・女性 42%である。

男女共に、一般論としては結婚したら充実した人生が送れると思っている人が約半数である。結婚積極群の男女は消極群に比べ、結婚したら充実した人生が送れると肯定的な考え方をしている割合が高い。しかし、結婚は男にとって・女にとって人生を充実させものかと、自分に引き寄せて考える場合には賛否両論に分かれ、また、どちらとも言えないという意見もあり、男女共に懐疑的傾向がある。

（3）子ども観・子育て観

・子どもの存在について

「子どもは自分の生命を伝える存在として大切」と思う割合は、男性 69%・女性 53%。「社会の次世代の担い手として大切」と思うは、男性 86%・女性 82%。「うるおいや活気を与える存在」であると思うは、男性 80%・女性 83%である。男性は「自分の生命を伝える存在」と思う割合が女性に比べ高く、女性はどちらともいえないという割合が高い。

結婚積極群と消極群とでは差異はないが、男女共に積極群の方が子どもは「自分の生命を伝える存在」・「活気を与える存在」として大切という割合が高い傾向がある。

・子ども好きについて

「子ども好き」と思う割合は、男性 61%・女性 65%である。しかし、「自分の子どもはかわいい」と思うは、男性 86%・女性 92%である。女性は男性と比べ、「自分の子どもならかわいい」という割合が高い。

男女共に積極群は消極群に比べ「子ども好き」・「自分の子どもはかわいい」と思う割合が高い傾向がある。

・子育てについて

「子育てには面白いことや発見がある」と思う割合は、男性 81%・女性 91%で、「子育てによって親は犠牲にするものが多くある」と思う割合はは、男性 59%・女性 48%である。女性は子育てによって犠牲にするものがあるが、面白いこともあるという割合が高い。

・「子どもを生み育ててこそ人として一人前である」と思う割合は、男性 34%・女性 19%で、そうは思わないという割合が男性 32%・女性 44%である。女性は男性に比べ、子育てが人の成熟性をあらわすものではないと思う割合が高い。

・「子どもがいなくとも充実した結婚生活ができる」と思う割合は、男性 40%・女性 49%で、そうは思わないが男性 26%・女性 13%である。女性は男性に比べ、子どもの存在によって結婚生活の充実は左右されないと思っている割合が高い。

結婚積極群と消極群とでは、男女共に積極群の方が「子どもを生み育てこそ一人前」と思う割合が高い傾向がある。また、男女共に消極群では「子どもがいなくとも充実した結婚生活ができる」と思っている割合が高い傾向がある。

（4）希望子ども数

・子どもを「2 人欲しい」と思う割合は、男性 57%・女性 56%、「3 人欲しい」割合は男性 16%・女性 18%である。男女共に子どもを 2－3 人欲しいと思っているが、子どもはいらないという割合は男女共に 6%である。

・結婚消極群の男女では、子どもはいらないという割合が高く、男性 10%・女性 8%である。

（5）性別役割観について

・「男性は家事や育児を分担すべきである」と思う割合は、男性 62%・女性 75%である。「男性は働き、女性は家庭を守るのがよい」と思う割合は男性 20%・女性 7%で、そうは思わない割合は男性 37%・女性 47%である。男性は女性に比べ、家庭生活に関しては固定的性別役割観のある人の割合が高い。女性は男性も家庭責任を担う責任があると考えており、固定的性別役割感のある人の割合は少ない。

しかし、個人の生き方あるいは考え方として固定的性別役割観を問われると、「男性は仕事に影響しない程度に家庭生活を大切にするのがよい」と思う割合が、男性 45%・女性 42%で、どちらとも言えないが男性 38%・女性 16%である。また、「女性は家庭生活に影響をしない程度に仕事をするのがよい」と思う割合は、男性は 45%・女性 42%で、どちらともいえないが男性 38%・女性 39%である。

以上のように、家庭生活ではなく個人のあり方として問われると、約半数の男女が固定的性別役割観を持っているといえる。

・結婚積極群および消極群別に家庭生活における性別役割観を比べると、「男性は家事や育児を分担すべきである」と思う割合が、女性積極群 73%・消極群 77%、そうは思わないという割合が女性積極群 5%・消極群 1%である。　女性の消極群では、男性は家事や育児を分担すべきであると考えている人の割合が高い傾向がある。　また、「男性は働き、女性は家庭を守るのがよい」と思わない割合は、男性積極群 29%・消極群 45%である。男性の消極群では、女性に対する性別役割観を持つ割合が低い傾向がある。

「男性は仕事に影響しない程度に家庭生活を大切にするのがよい」と思う割合は、男女共に積極群の割合が高い傾向がある（男性積極群 54%・消極群 45%、女性積極群 53%・消極群 48%）。

「女性は家庭生活に影響しない程度に仕事をするのがよい」と思わない割合は、男性積極群 13%・消極群 18%である。

男性は女性に比べ、家庭生活に関して固定的性別役割観のある人の割合が高い。しかし、考え方全体をみると、男女ともに固定的性別役割観がまだあるといえよう。結婚消極群では男女ともに、固定的性別役割観に対して否定的な人の割合が高い傾向がある。

3）性別の受容と自尊感情

（1）性別の受容

・「自分の性でよかった」と思う割合は、男性 74%・女性 52%で、そうは思わないという割合が男性 2%・女性 9%であり、女性は自分の性別を受容している割合が低い。

結婚積極群の男性は消極群に比べ、性を受容している割合が高い（積極群 81%・消極群 66%）。

・自分の性をどう受容しているか

[自分の性をよかったと思う場合]：男性は、「体力・パワーがある－42%」、「理屈抜きによい－39%」、「男は妊娠・出産しない－19%」である。女性は、「女は妊娠・出産できる－41%」、「理屈抜きによい－31%」、「女らしさを備えている－28%」である。

積極群の女性は消極群に比べ、自分の性がよいと思う場合は、「妊娠・出産できるのでよい－47%」・「家庭で優遇されるのでよい－13%」・「社会で優遇されるでのよい－22%」であり、積極群の方が自分の性でよかった思う割合が高い。

[自分の性がいやだと思う場合]：男性では、「家族の期待の期待に応えなくてはならない」・「男らしさを要求される」の 2 項目が各々 14%である。女性は、「雇用や職場で差別される－35%」、「社会で差別される－31%」、「同性の考えや行動パターンをいやに思う－26%」、「女らしさを要求される－23%」・「体力・パワーがない－23%」である。

男性は、自分の性をいやに思う場合が少ない。特に、積極群の男性は自分の性を肯定的に受けとめている割合が高い。積極群の女性は消極群に比べ、社会的な性的差別を感じる割合が低い傾向があり、家庭や社会で女性は優遇されていると思う傾向がある。

（2）自尊感情

・男性では「自分が好き」という割合が 62%・「取り得えがないとは思わない」が 57%、「周囲に受け入れられていないとは思わない」が 52%、「成果が認めてもらえないとは思わない」が 51%などである。

・女性は「周囲に受け入れられていないとは思わない」が 67%、「運が悪いとは思わない」が 60%、「自分が好き」が 56%、「取り得がないとは思わない」が 55%である。

男女を比べ差異があった項目は、「自分が好き－男性 32%・女性 24%」・「魅力があるとそう思う－男性 12%・女性 8%」・「能力があると思う－男性 19%・女性 7%」・「平均的だとやや思う－男性 14%・女性 31%」」である。

・男性の結婚積極群と消極群を比べると、「平均的であるとは思わない」が積極群 23%・消極群 46%である。